



Title	スペイン語における胴上げ文とその意味
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学論集. 1998, 18, p. 21-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79746
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スペイン語における胴上げ文とその意味

出口 厚 実

La construcción autotemática en español (Resumen)

Atsumi DEGUCHI

En español se observa principalmente en el registro coloquial un esquema estructural construido por el infinitivo antepuesto y el mismo verbo sea en forma finita o infinita, como sigue:

-¿Y pasó algo?

-No, pasar no pasó nada. Skydsgaard(1977:1121)

Las oraciones que incluyen esta construcción se clasifican en varios subtipos según los criterios sintácticos del cumplimiento de subcategorización verbal correspondiente por un lado, y de la presencia o ausencia de relaciones anafóricas en ambas formas verbales por otro.

La estructura en cuestión no se debe considerar como un ejemplo especial del llamado procedimiento de tematización (o topicalización) del propio verbo. En cambio hace falta introducir un nuevo concepto y término para cubrir tanto su función pragmática como los ámbitos sintácticos en los que se desarrolla dicho esquema gramatical.

El autor propone llamarla “autotematización”, o sea la coincidencia del tema con el rema, vista en la perspectiva del predicado que selecciona una participante suya como tema, pues es aquél el que se especifica a sí mismo como tema para realizarse excluyendo así otros argumentos de los posibles candidatos de esta función discursiva. El uso de la autotematización se caracteriza por una reservación o restricción semántica que se impone sobre la interpretación de la situación implicada por el predicado, lo que a veces conlleva el efecto secundario de confirmar la topicalidad del verbo y sus participantes.

0.

スペイン語には、動詞不定詞形を文頭におき、同じ動詞を定形で繰り返す次のような文法形式（斜体の部分）が、主に口語で用いられることがある。

(1) -¿Y pasó algo?

-No, *pasar* no *pasó* nada. Skydsgaard (1977:1121)

特に頻繁に利用される文法手段というわけでもなく、また、文の中核的意味形成に限れば、この不定詞はなんの貢献もしないし、その談話上の効果が場面依存的で捉えにくい性質であることから、標準的な文法書で正面から取り上げられることはほとんどなかった。しかし、不定詞の用法の1つとして、その背後にある統語構造を分析しようとする、既成の手近な構造タイプと範疇概念で片づけられない特異性を秘めているのに気づく。また、さまざまな興味深い統語・意味現象と密接に関わるのも明らかである。

ここでの目標は、この種の構文と類型に大雑把な仕切りを加え、その範囲を明確にして、統語的外面に基づく同定を試みることと、具体的な発話の実例に則して、その意味機能を確認することに限定する。

1. 胴上げ文の統語的外観

1. 1. 胴上げ文

スペイン語では、動詞そのものも他の文構成要素と同様に主題化を受けるのではないかという示唆は Rodríguez-Izquierdo(1985)にみられ、『内部話題 *tópico interno*』という用語が提案されている。Jiménez Juliá(1996) は、いっそう明確に、下記の文を主題化構文の例として引用している。

(2) Nadar, nado bastante, pero correr, no quiero ni aprender. Jiménez Juliá (1996:288)

ただし、他の文法関係要素の主題化と、動詞の不定詞による主題化との差やその統語・意味上の諸特徴については議論されていない。

Martínez Álvarez(1966:38) は、このタイプの構造に対象を絞った論文としては恐らく最初のものであると思われる。そこには、簡潔な記述であるが、いくつかの基本ポイントは漏らさず指摘されている：

「語連鎖の冒頭に配置して強調したいものが、述語の付加語句 *término adyacente* でなく、それ自身の中心語であるとき、中心語の語彙的意味を保持するが動詞諸範疇を欠いた、不定詞と

呼ばれる動詞派生形を利用するのは当然である。しかし、強調される語彙素は述語構造でそれ自体で何の機能も果たさないで、他の場合のように参照指示語が現れる必要はない。」

「両構文は話者の表出的関心から動機づけられた、その内容を強調したい句を冒頭におく同一のものとみなさなければならない」

すなわち、今日的な言葉使いで言えば、彼もまた、(1)を一般的な「主題化」の中に含まれるべき事例とみなしている。⁽¹⁾

「強調」という機能を重視しているのが Skydsgaard(1977:1121) で、採取した10例以上の例文を提示して、これを強調不定詞 *Infinitivo intensificador* と呼んでいる。

Steel(1985) もその意味機能面を考慮して、焦点化修飾句 *Focussing Adjunct* と名付けて、英語構文との対照を示している。彼によれば、この構文は強い断定とためらいがちなあるいは弱い強調(both strong assertion and hesitant or weak emphasis)の両方を伝達するという。

本稿は、出口(1994)で導入した「胴上げ文」という名称と概念を用いる。その理由は先行の文法研究で提案されている用語は、そのカバーする構文の対象範囲が明確でないこと、及び、十分に実証されないままでこの形式の担う機能をそのラベルとするのに抵抗があるからである。出口(1994)の基本概念を受け継ぎ、胴上げ文は、「主題化」と関連する点において、「動詞の主題化」パタンの恐らく一変種とみなされるであろうが、同義概念とは扱わない。その特殊な下位範疇をなす余地を残すが、その所属問題そのものはここで立ち入らない。また、「胴上げ文」がスペイン語統語論の中に“固有の特長”を具備した独自の構造スキーマであることを裏付けようとするものではない。もっとも、その可能性をあらかじめ否定するべき理由もないが、この段階では検討の範囲を絞り、統語的外観を配慮した最小限度のカテゴリーを設定し、相互関係を理解するというのが当面の目標である。

文(2)の中で、「(私は、)泳ぐことは、かなり泳げる」に相当する、*nadar, nado bastante*の部分が「胴上げ文」の典型例である。動詞不定詞形 *correr* を名詞句の左方転移や話題化のプロセスと同様、*aprender*の左側に、動詞を冒頭におく後位文の構造は、いわゆる「主題化文」として一般化されるかも知れない。しかし、*nadar*と*nado*の関係はこれとは異なった統語的形状を示し、意味作用に異なる影響を及ぼすように思われる。対応の日本語文では、主題を導入する際に伴う特徴的な助詞、「は」が現れる事実や、文頭位を占める点からしても、*nadar*を「主題」とする分析が妥当と思われるかもしれない。しかし、もしこれが主題であるのならば、*nado bastante*における*nado*は題述の一部ではなくなるのであろうか？あるいは、同じ語彙がテーマにもレーマにも双方に出現するのが許されるかという問題も生じる。

もちろん、レーマに動詞が含まれるように見えるのは、見せかけであって、実際は、*bastante*「かなり」という意味と「法・時制」だけであるとして、理論上の整合性を優先させる方法はある。胴上げされるのは、*nado*=*nadar*+(1 sg/ind/non-past)の中の*nadar*であって、*rema*に

存在するのは、仮想的には屈折要素であるが、スペイン語形態論の制約でこれを切り離せないために、nad- が音韻的に反復されて（従って余剰的に）、やむなく題述部にも存在するような外装を纏っていると考えるのである。一方、テーマがすなわちレーマになるということを予定しつつ主題にする、言い換えれば背景をそのまま焦点に合一する特別な方策を実現した、『主題題述一致』構文とみなすことも可能であろう⁽²⁾。

実際は動詞だけでなく、動詞の下位範疇化要素や補語が胴上げに同調するので、さらに複雑な様相を呈するが、柱となる骨格だけを透視すれば、ここで、胴上げ文と称するのは、次のような構造で特徴づけられる「文」である。

(3) [V_{1-inf} + (α) [V₂] o] O

ただし、V₁, V₂は同一動詞

αはV₂を含むVPに支配される要素

O及びoはスペイン語文として認められる一般的な条件を充足する必要がある。すなわち、少なくとも、『屈折』要素と語彙項目としての動詞を含んでいなければならない。V_{1-inf}は動詞の不定詞形であり、内部にある文oに先行して現れるのが基本的な特徴である。V₂は以下で見るように、実際上はほとんどが、動詞定形 V_{-flex} であるが、そのことを必要条件とはしない。o内に存在する別の動詞V₃に支配される不定詞形であるようなケースも「胴上げ文」に含めたいためである。(3)の構成は、その外見からみても、厳密な意味で「動詞」主題化にも「動詞句」主題化のいずれにも相当しないことがわかる。V_{1-inf}はオプションαとして付接辞、目的語、補語などを伴うことができるが、動詞単体の胴上げでも構わない。逆に、V₂に関連する動詞句全体をV₁の不定詞形動詞句とすることもあり得るが、胴上げ部分に入るのは動詞句要素の1部分だけでもよい。

1. 2. 胴上げ文のパタン

統語面からみた胴上げ文の類型は、胴上げ部の動詞(V)と本体部の動詞(v)の動詞のあり方に関連する2つの変数を中心に注目して仕分けすることができる。1つは動詞が統語支配を充足しているかどうかの観点である。自動詞文の場合、その動詞が必要で適切な共起要素を随行させているのか否か、見極めにくくなることが多いが、この基準は特に他動詞に関し当てはめるとき顕在化する。もう1つは、それら共起成分、すなわち目的語、補語などが前方照応的要素か、非承前要素かの区別である。前者を“飽和条件の充足”と呼び、動詞が飽和しているときは、動詞V, vの右にS, sまたはP, pを添える。ここで、Sは非承前要素を、Pは胴上げ文の外部と結び付けられる承前要素を指す。小文字のs, pは本体動詞が下位範疇化される成分を表して

いるが、P, p いずれも、ほとんど常に、付接辞形代名詞である。なお、V S -vpのパタンにおけるSとpは胴上げ文内部で相互に照応しているものとする。

これらの2つの変数の組み合わせから次の9種が理論上存在する。

- (4) i) a. V - v
- b. V - vs
- c. V - vp
- ii) a. V S - v
- b. V S - vs
- c. V S - vp
- iii) a. V P - v
- b. V P - vs
- c. V P - vp

例文(2) Nadar, nado bastante では、bastante は随意的な副詞要素であり、動詞支配の非要求要素とみなされるので、この構文はi) aのタイプに属す。9つの類型がすべて許容され、または観察されるのではないが、胴上げ構文は予想以上に多くの種類をかかえ、内部構造も均質様でなさそうなのが以下のリストアップで判明するであろう。これらの具体的なサブパタンでの動詞に対して欠損統語項が存在するか否かに関して、飽和／不飽和は定まった主張をしていない。例えば、不飽和Vと飽和vsからなる(4) i) b. で、両者間の後方照応に支えられたゼロ形式が胴上げ部に潜在するというような分析を基礎にしているのではないことを断っておく。

さらに、統語的に有意義な特性として、否定辞の存在を胴上げ部、本体部のそれぞれに考慮する必要がある。また、v, vs, vpに関して、先に示唆したように、それら自身が定動詞か、別の動詞の支配下にある不定形かという特徴も適格構造条件と関わってくるであろう。しかし、いたずらに細別化し全容を見渡しにくくする危険を避けるため、先述2基準のみを配慮した(4)のパタン化を当座の枠組みとして、これを基礎に他のいくつかの特性の関与を見ていくことにする。

各タイプに対して、該当例が発見されたものを下に引用するが、この中には筆者の作例が含まれている。〔DG〕と注記されたものがそれで、3人のスペイン人インフォーマントが特別なコンテキストを与えられなくても許容した文である。

1. 3. 胴上げ動詞不飽和タイプ

i) a

(5) Saber, sí sabe, pero lo dice muy mal. Cascón Martín(1995:140)

(6) -El paquete lo puedes abrir perfectamente aquí-intervino mi madre.

-Sí, claro, poder podría, Pero... [NV:236]

(7) Hace un rato haber no había. Vigara Tauste (1992:149)

(8) - ¿Hablas español?

- Hablar, hablaba antes, pero... [DG]

i)b.

(9) Hablar, hablo español. [DG]

(10) Pues, escribir, no escribo nada. [DG]

(11) Hacer, lo que se dice hacer, no haría nada. Steel(1976:27)

i)c.

(12) Gustar, me gustan. [DG]

1. 4. 胴上げ動詞飽和タイプ (非承前)

ii)a.

(13) Hablar inglés, sí (que) hablan. [DG]

(14) No, Nidia, no pares, yo volver atrás no vuelvo. [CN:79]

ii)b.*

ii)c.

(15) Desde luego, percibir cosas sí que las perciben, ahora... [MD:56]

(16) Decir las cosas puedes no decirlas y hasta parece que así has dejado de pensarlas,(...) [NV:169]

1. 5. 胴上げ動詞飽和タイプ (承前)

iii) a.

(17) Acordarnos de ella nos acordábamos siempre,... [CN:5]

(18) -¿Hablas español?

-Hablarlo, hablo. [DG]

iii)b.*

iii)c.

(19) Pero gustarme me gusta mucho. [SV:269]

(20) Saberlo, lo sabíamos, claro que sí. Steel(1985:152)

(21) y si no me casé no fue por falta de ocasiones, que tenerlas las he tenido, como la que más, en este pueblo. Skydsgaard(1977:1121)

1. 6. 複合動詞構文からの胴上げ

上例(6)では、動詞迂言形 poder + 不定詞の poder を文頭に前置した構文が見られたが、被支配不定形動詞を胴上げすることも可能である。後者が不定詞形であれば、 V_1 、 V_2 は形態上も完全に同一形を呈することになる。

(22) Como querer, sabe hacerse querer. [BP:85]

(23) Acudir a Dios, podré acudir. Skydsgaard(1977:1121)

(24) Llover, puede llover. [DG]

(25) Llover, puede no llover. [DG]

1. 7. 従属文からの胴上げ

胴上げ不定詞が従属節の定形と符合する例も実在が確認される。(28)(29)のケースは主節述語が顕在しない、むしろ「半主文」であるが、ここに含めておく。

(26) Ocurrirle es posible que se le ocurra. Cascón Martín (1995:134)

(27) Querer no sé lo que querrán, lo que sí te puedo decir es que deberían tener más respeto. Skydsgaard(1977:1121)

(28) Aquí nos aprendemos las cosas de memoria. Inventar, que inventen ellos. Steel(1985:152)

(29) Por irse, pues que se fueran, pero yo no podía estar dentro de ellos, ... [NV:124]

1. 8. 導入子の前置

前掲(22)に見られるように、胴上げ要素(不定詞)に、como, por, de(,si)などが前置されることがある。これらが前置詞(接続詞)であるという理由から、前述の諸構文と切り離して、別個の構造分析を与えるという案も考えられるだろう。が、ここではむしろこれらの小辞のもつ固有機能(あるいは語彙意味)をたとえ否定しないとしても、小さく評価したいと思う。細部において、導入子を伴わない形式と、また導入子の違いによる振る舞いの差が観察されるとしても、基本的な統語環境(そして、恐らく意味特徴)の共通性【(3)の式に一般化される】の方に重きを置くことにする。ここで問題にしている現象を主題化と主張する論者は、これらマーカーに主題化標識または類似の名称を与えるかもしれない。しかし、その場合でも、「主題化」を合図するのは導入子のみによるのではなく、不定詞前置と動詞据え置きという(3)の仕組み自体によっても合図されている点を忘れてはならない。

i) 'como'

(30) -Como gustarme, a mí me gustaría-dijo don Roberto, despacio- [UV:86]

(31) -...y qué hace tu novio?

-Pues, mujer, como hacer, lo que se dice hacer, no hace nada. Steel(1976:28)

ii) 'por'

(32) -No, no; por pasar, no pasa nada. Steel(1976:224)

(33) Y por haberlos los hay incoloros. Vigara Tauste(1992:149)

iii) 'de'

(34) ¡De haber trabajo sí hay! Arjona Iglesias(1989:163)

(35) Pero de hacer las cosas sí las hace. Arjona Iglesias (1989:163)

1. 9. 付随要素 *sí, sí que, pero, aunque, etc.*

胴上げ文の本体と周辺にしばしば特徴的な談話機能を持った語句が現れる。胴上げ文本体動詞に *sí* または *sí que* の先行が多く例に見られる。

胴上げ文の前後の文との接続について何らかの語用論的相殺や補償を付言して、情報伝達図式のバランスを計ろうとする *pero* は、とりわけ目立った使用が観察される。1つの典型化された雛形にまでなっているとみなせるほどである。後位文との境目にこの接続詞が出現するのが最も多いが、胴上げ文全体が *pero* で先導されることもある。また、*aunque, porque, que* などの副詞的従属で前後の文脈でつながれることもある【以下4例 Skydsgaard(1977:1121)】。

(36) Si pudiera venir esta tarde...-Poder, puede. Pero ya sabe a lo que se expone.

(37) Sí. Dárselo sí se lo dieron, pero cuando fueron a Caja a cobrarlo, las dijo el señor Seco que no había dinero.

(38) Conocerla, la conozco, aunque hasta ahora nunca haya hablado con ella.

(39) Todos los experimentos que usted quiera, pero curarse, no se cura.

この種の表現と親和しやすい事実は、胴上げ文の基本意味を解明する一つの鍵になるものと予想される。

1. 10. 他の主題化との共存

動詞の項成分が主題化されている上に、さらに不定詞が前置され、胴上げ構造と共存するのが次例(40)－(42)である。

(40) Servir, de poco servirá-frente al reformismo, como frente al maligno, non serviam!-Anguita dixit-, pero por lo menos puede así prolongarse la vida de una especie política en vías de extinción. [PS:10]

(41) -Como gustarme, a mí me gustaria-dijo don Roberto, despacio-Quizá pudiera pedir un préstamo... [UV:86]

(42) Como leer, en San Sebastián no lee nadie. Skydsgaard (1977:1121)

また、次の2文が示すように、胴上げの後に、胴上げ文の状況補語や主語が主題化を受けると考えなければならない構文も存在する：

(43) Hace un rato haber había. Vigara Tauste(1992:149)

(44) -No, Nidia, no pares, yo volver atrás no vuelvo. [CN:79]

2. 胴上げ文の機能と意味

2. 1. 先行発話の復唱と話題性

直前または最近出の動詞述語を文頭で反復する不定詞の“独立的用法”は、スペイン語において一般的な現象で、実際、胴上げ文の起源をそれに結びつけようとする見方も提案されている(Cf. Martínez 1966)。例えば、前掲(6)をその発話コンテキストの中でもう少し詳しく見てみよう。

(45) -El paquete lo puedes abrir perfectamente aquí-intervino mi madre.

-Sí claro, poder podría. Pero...

-¿Pero qué?

Hubo un silencio.

-Pero no quiere y es natural.

Era la señora francesa la que había hablado. [NV:236]

客人に託されたプレゼントをその場で開けるよう、母に言われたのを承けた娘の答えの中に、poder podría が現れている。この場で包みを開けることは「できるけれども、、、」実際はしたくなく、また、結果的に開けない状況での発言である。「できる」ことを行うには、まず父母と客夫婦の歓談の場所に腰を下ろし、会話に加わらなければならないが、それを避けたかった事情があった。

「でも、、、」で中断された発話に対話者は気がかりで、わざわざ聞き返しているが、不定詞+動詞定形のこのパターンは典型的にこのような状況に相応しいものとみなされる。

例文(36)(37)もそうであるが、胴上げ文は接続詞 pero に後続されることが多く、また上に見たように、その動詞語彙そのものが直前の、あるいはごく近接したコンテキストで言及されているのが普通である。その実現(or真偽)について不審を持たれている事態を“そのまま”確認し、とにかく承認・否認しておいて、それに後から留保の条件を付け足すとか、または対照的に否定・肯定される他の事柄を前景に引き出すための道具立てと考える。胴上げされた不定詞は、従って、このような例では、本体定形動詞の語彙部分のみが1種の統語プロセスによって仮想提題として移動されるというよりは、一種の法性を含んだ独立不定詞の用法と定形動詞による通常 rema の

断定の自然な合体から生じているとも分析できる。つまり、胴上げ部も独立した意味内容、特にその法的価値を積極的に保持する可能性をもつ点で、一般の主題化文との差を認めることができるのではないだろうか。

逆接接続詞 *pero* に実際に後続されなくても、胴上げされた述語と、他の関連述語を切り離して、その連想関係を否定することに焦点を当てる点は、次の文にも観察される：

(46) ¿Y os vieron? Pues ese es la cosa. Vernos, nos vieron... Ahora, lo que ya no sé es si se dieron cuenta de que éramos nosotros. Skydsgaard (1977:1121)

「われわれが姿を見られたこと」は確かだと認めている。しかし、「彼らがわれわれだと気づいたかどうか」は不明だと述べている。明らかに、胴上げ文で話者は見られたことが重要であると強調しているのではない。むしろ、見られたことから派生する、あるいは推測される、結果について白紙の状態に固執している。

対話者の直前の発言で言及された具体的事態にすぐさまコメントする使用例は、実際、胴上げ構文の基本的な用法と見なせる。例えば、質問や疑念の表明に対して、同じ語彙を用いるストレートな反復、または復唱であるため、談話の連続性において透明である。Steel(1985:151-2,178)は上例の他にもかなりの数のこの種の事例を報告している。

(47) -¿Qué harías tú en mi lugar?

-Hacer, lo que se dice hacer, no haría nada. [p.152]

(48) -Sé que trabajáis mucho.

-Sí, señor, eso sí, trabajar, trabajamos. [p.152]

不定詞形動詞と同一の動詞の初出が対話者に由来する場合だけでなく、話者自身も直前に定形で利用していたものを、再度、胴上げ文で繰り返す例も見られる：

(49) Enc.-Es verdad a los treinta y seis años; ¡huy! todavía lo que te queda!

Inf.-¡Huy! sí claro, eso, pensamos eso, pero ya queda lo más peorcillo, lo más feo. Quedar, si queda, pero...ya a base de reuma, a base de...[MD:191]

この会話は、ノスタルジックな性向の女性インフォーマントが、これから先の人生がまだまだあると対談者から言われたのを受けている。彼女が「まだ（先が）あることはある」と認めるものの、（人生の）最悪の部分、最も醜い部分しか残っていないと言う。動詞 *quedar* で表される名目的意味は肯定だが、実質的には否定的に解釈したいという自分の気持ちが表れている。後に続く発話でも、「けれども、リウマチのために、」なる部分で、自分にとっては真の意味で

人生の先が残っていない、という隠された悲観的な見方がほのめかされていて、それに矛盾することを意識しての譲歩の肯定である。

(50) -De su trabajo...¿Le gusta su trabajo? ¿Se siente bien en él?

-Mucho. Me gusta mucho. Sentirme bien, no, porque me siento un poco frustrada en él. No, no encuentro medios, no he podido nunca realizar del todo aquella labor que creo yo que se habría de realizar en la enseñanza, por unos motivos o por otros. Pero gustarme me gusta mucho. [SV:269]

仕事が気に入っているかどうかについて「大好きだ」と答え、しかし、職場を快適ではないと打ち明けている話者は、その理由を述べた後で、もう1度、（仕事が）「好きなことは大好きだ」と繰り返している。付帯状況から、その逆が推論されそうな場合に、その推論に反する断定をしようとする場合なので、逆説の接続詞が先行するのは不思議ではない。仮に、このようなケースを対比的な機能と呼ぶことが出来るとしても、事態が適応される項と適応されない項の差を顕著にすることではない。「私は好きだが、他の人は嫌いである、あるいは好きかどうか分からない」という、対象となる意味領域の实在を強く印象づけようとする対比性とは異なる。述語意味自体の存在・真偽に疑問が提出されたり、あるいは提出されているかのような仮想対話を介して、Pであって、その逆～Pでないことを際立たせる仕組みである。

(51) Enc.-Y dolor ¿sienten dolor?

Inf.-Yo no sé si sienten dolor. Ni siquiera sé si tendrán..., si tendrán sentimientos... Desde luego, percibir cosas, sí que las perciben, ahora... como siempre se representa a los seres extraterrestres sin sentimientos, yo no sé si éstos sentirán o no sentirán..., [MD:57]

前の文脈で異星人が会話の話題となっていて、資料提供者は、異星人が視覚・聴覚・触覚などの感覚を持つと主張する。動詞 *percibirse* は少し離れているが既出語である。彼らは物の知覚はできるが、苦痛を感じるとか感情を持つのかどうかはわからない点を繰り返し力説している。類似の命題が不明・不確かであるけれども、上位概念の *percibir* については、対照的に確実であると断定できる範囲にあることを明確にしたいために、胴上げがなされたのだろう。

話者自身が持ち出した話題に直接由来するが、対話者の先行発言で言及された動詞でないこともあり得る。ただし、当事者間ではこの述語意味が明白なテーマ性をもつと意識されている。

(52) -Yo no tengo familia.

-¡Pobrecita! ¿Es posible?

-Bueno, tenerla, sí la tengo. Pero es lo mismo que si no la tuviese. Steel (1976:27)

自己の前言を翻して逡巡しながら訂正する、前掲の状況に見られるのは、単純な断定の補強や強化ではあり得ない。不信の表明に対して、「家族がいない」こと再確認しているのではないからである。ある種の含みをもった最小化された承認であるために、次文が pero で始まり留保やコメントが続くことになる。不定詞形動詞とその参与成分で構成される意味の厳密解釈を聞き手に要求しているといってもよい。すなわち、この名目意味から敷衍されるようなさまざまな慣習的含意を適用されないように釘を指している。「(家族が) いることはいます」というのは法的・形式的関係で、話者が取り立ててこの事実を強調しようとする理由はない。むしろ、後半で表明しているように「家庭が存在しない」のと同様の実状を表したかったのである。

胸上げ文の中に、しばしば si(que)が含まれるのは、断定の強化ではなく、動詞の意味を拡大的に解釈しないようにとの、話者の譲歩を表す「確かに」に相当する。述語意味が特に対話者によって強く主張されているケースでは、このような譲歩の色合いはかなりはっきりと認識される。

これと類似のケースが、厳密化の語句を明示していない次の文である。「本音を言えば」、「正直に告白して、文字通りその言葉を使えば」が含意されていると考えられる：

(53) -¿Pero, de veras te gustó?

-Bueno, se nos pasaron las horas más rápido, ¿no?

-Pero gustarte gustarte, no te gustó.

-Sí, me da lástima que se termine. [BM:43]

話者自身が出した質問に用いた動詞 gustar に、相手は明確に答えをしなかったので、再度、同じ動詞を用いて真意を勝手に判断したところである。本当は（この映画の話が）気に入らなかったのではないかと発言者は疑っている。

一方、次の一節は小説の冒頭ページの17行目に見られるもので、acordarnos de ellaが対話者の直前の発言を確認して、siempre やその後に続く内容で、むしろその有効域を拡大補強している。「母のことを思い出すと言えば、私たちは始終思い出していたわ」に見られるのは、胸上げ不定詞の述語意味に対する対比性ではなく、“siempre”を焦点化して引き立てるための述語本体の主題化（背景化）であろう。従って、「記憶」の範囲を制限したり、他の行為を否定するための補償的是認ではない。

(54) -Cuando murió mamá pasaba lo mismo, ¿te acordás?, a esta hora volvía el recuerdo más fuerte que nunca.

-Acordarnos de ella nos acordábamos siempre, lo primero que yo pensaba cuando me despertaba era que mamá no estaba más. [CN:5]

2. 2. 先行文脈の話題継承

対話者または話者自身のすぐ前の発話に生じた動詞述語をおうむ返しに繰り返すのではなく、すでに談話のトピックとして語られ継続している内容や、それに密接した述語を胴上げ文に用いる例がある。胴上げ部の動詞は語彙としては言及されていないけれども、その実質的中身が先行文脈で話題に上っているのが、次の例でわかる。

(55) -¿No será usted, por casualidad, don Policarpo, el notario de la calle Alta?

-No, hija; no soy de aquí.

-¡Ah!...Mire, pues si pregunta por don José López, el “Sargento”, ahí vive; y si aporrea bien la puerta puede ser que le abran, porque la mujer está un poquillo lela, y a veces no quiere oír...Pero como estar en casa sí que está. Antes la vi entrar yo misma.

[LL:18]

訪問先の玄関をノックしたが返事がないときの、訪ねてきた客と隣家の人とのやりとりであるが、在宅なのか、留守なのかという事態、すなわち *estar no estar en casa* の情報が最も求められている部分である。すなわち、在宅しているという実態があって、それに関して何かを述べようとしているのではない。*rema*の前景化のために、名目的な主題を設定をするという技巧と解釈はできるが、通常の意味での主題を確認しているとは言えない。ここでは、*pero*が後続していないが、「家にいることは間違いなくいる」、*pero no contesta*「しかし返事をしない」が含意されるので、典型的な用法との差は小さい。

(56) Abuela-Punzadita, ¿eh? Pues mira qué bien te va a ir con tanto ahorrar la lengua.

Marko-Vender, no vendí. Pero hablar, sí hablé. [BP:54]

ここで、Markoの言葉は「確かに売れなかったさ。だけどしゃべるのはしゃべったよ」と訳されるであろう。模型の帆船や水夫の木彫り人形を外人に売る商売をしているMarkoが、売れなかったそれらを持ち帰って来た場面で、祖母が少し前に、*Apostaría a que no has vendido nada.*と発言している。また、直前に、売るための口上を実演して見せたり、黙って突っ立っているだけではだめだと非難している。従って、動詞“*hablar*”は発話中に先行詞をもたないけれども、間接的にこの行為の有無について話が繰り返されているのは明白である。*vender*の胴上げについては、*pero*が後続する典型的なタイプであるが、*hablar*についてはこのような留保は

ないのであろうか。おしゃべりが即成果（＝売り上げ）に結びつくという、対話者の確信を推定しているマルコはそのような関連づけのリンクを切る意図を強く押し出したかったのである。商品が売れ残ったのは、自分が積極的にしゃべらなかったからではないということを含めている。ここでも、胴上げされた動詞の述語真実性に対して対話者が安易な類推を及ぼすことを諫めていることがわかる。従って、hablar, sí hablé の後にも、実際は pero no pude vender の内容が想定される。

(57) -Como gustarme, a mí me gustaría-dijo don Roberto, despacio-Quizá pudiera pedir un préstamo... [UV:86]

避暑行きを勧めている息子たちの発言があった後に、母は経済的な理由からまったく実現性がないとあきらめて、真剣に取り合わないのであるが、父の Roberto は上のように言う。A mí の主題化は、妻との考えの相違を対照する働きを示している。一方、「行きたいかどうかと言えば」部分を取り出して冒頭においたのは、実現のために解決しなければならない諸問題、職場で休暇を取れるか、金を工面できるかなどを、ひとまず棚上げして、「行きたい気持ちがあるか否か」に限って断定を下したいためだろう。そして、その後、「しかし」で導かれるべき内容は、妻への配慮から沈黙して、逆に積極的に子供らに賛意を示して旅行を具体化する話へとつないでいる。

(58) Abuela-¿Y quién no? Todos en el pueblo son amigos suyos; para todos tiene buena palabra. Y cuando se sienta en el pretil a hablar con los viejos, parece uno de los nuestros.

Marko-Como querer, sabe hacerse querer. Y mal dispuesto no es: en dos semanas ha aprendido a tirar las redes como el mejor.

Abuela-Y luego, siempre de buen humor, y tan llano con todos. ¡Con el mundo que ha visto y las cosas que sabe!

Marko- ¡Alto ahí! Por ese lado ya no vamos bien. Como cabal amigo, lo que se pida. Pero saber, lo que se dice saber de verdad, no sabe nada de nada. [BP:88]

上文には2例の胴上げ事例が含まれる。主人公が村人に親切で好感を持たれているというコンテキストの中で、Como querer, sabe hacerse querer が出現する。先行談話には querer も、saber querer も用いられていないが、「(人)を好む、愛する」あるいは「好まれる、愛される」という述語は会話者が共有している話題に密接している。直後の表現「それに、なかなか器用だ。二週間で、一番うまい奴のように網投げを覚えちゃった」は、この事実と矛盾しないで、むしろ補強する役割を担っているのに、胴上げ文に訴えているのはなぜだろうか？

前の *querer* 胴上げと、後の *saber* 胴上げとが *pero* を介して弱く連係していると解釈できる。直接的には、この *pero* は直前の *¡las cosas que sabe!* 「ずいぶんと物知りだ」に対置されているが、祖母の方が主人公を高く評価しているのに対して、Markoの方は、後に異論を唱えるように、他のいろいろな面はさて置き、という留保を付けたい心理が働いたと考えられる。後出の *pero saber, lo que se dice saber de verdad, no sabe nada de nada.* は不定詞の前に *pero* で予告されているとおり、*saber* の適応範囲を狭く限定した「本当に知っているかどうかといえば」、という基本的な用法である。

(59) *Por haber, hasta hubo en la infancia de mi madre un ciervo y un pequeño jabalí domesticados.* [ER:169]

「いたと言えば、母の子供時代には飼ひ慣らした鹿や子供のイノシシまでいた」という描写である。前方の記述でさまざまな鳥かごや檻が家の中にあったこと、しゃこ、カラス、ミヤマガラスなどの鳥を飼育していたことが述べられていて、野生動物の存在が話題として提出済みである（対話文でないが、読者に知られている）。また、3つ前の文で動詞 *haber* は実際に言及されている (*Había en la casa, pues, infinidad, incontable cantidad de jaulas, todas distintas, todas mohosas y viejas.*) が、このケースでは、留保的な意味限定のニュアンスは感じられない。どちらかと言えば、同じ動詞を述語として適応できる範囲をむしろ拡大するための、足がかりとして不定詞が使われた結果になっている。従って、本体部の *hubo* はレーマそのものではなく、存在物の *un ciervo y un pequeño jabalí domesticados* の方が焦点化されている。

2. 3. 主題の先取

前文脈での共通話題として認識されていないような述語が胴上げされる例もみられる。文(60)は、対話でない段落の冒頭近くの地の文に出現する。

(60) *Esta noche pondré la cinta que, después de dejar de vernos, me mandó a Madrid. Escribirme apenas me ha escrito. Las cartas no eran lo suyo, no le gustaban, como al amante de la copla,...* [NV:132]

後のテーマとしては展開されるが（一彼は手紙が苦手だった、好きでなかった—という説明が続く）が、先行文とは、強いて言えば「テープを送って来た」と弱く関連するだけである。聞き手（読者）が「Manoloがあなたに手紙を書いたのか」という疑問を懐く状況はないし、「手紙を書いたかどうかという点では」のような制限的なニュアンスは感じられない。中立的な語りの中であって、胴上げ文全体はむしろレーマの一環であると考えられる。

(61) -Yo creo que tendríamos que haberla llamado para dar la vuelta con ella.

-No, Nidia, no pares, yo volver atrás no vuelvo.

-Sí, vamos a llamarla, me da lástima a veces. Y a veces me da rabia.

-No, Nidia, yo no vuelvo atrás, es mucho caminar. [CN:79]

(61) の yo volver atrás no vuelvo 「私は引き返すなんてことはしないわよ」は強い決意を表す文脈で用いられている。動詞の行為は語彙として既出でないが、散歩に連れ出すために電話をかけるということが、「引き返す」を前提にしているので、間接的に対話者の提案内容と言えるが、明確な話題性を欠いている。主語の yo もまた主題化されている非常に有標度の高い構文である。会話のスレッドから容易に導かれるような、仮想のテーマを話者が先回りして想定し、それを一時的な主題として胸上げしている。あるいは介在すべき主題をショートカットした用い方と言えるかも知れない。

前掲の文(40)においては、新聞の読者が推論する可能性のある疑問命題“役立つかどうか”を当面の話題から自然に分岐した話題とみなして差し支えない。文頭不定詞 servir は明示化されないこの内容を取り立てようとしたのである。

さらに、次の例も、同様である。電報の用紙を3度請求したのに、無視されたことを述べている。当然な手続きの流れが処理されないのに不満な話者は、実現された部分とそうでない部分の断絶面をことさら目立たせるために胸上げ文の効果を利用したのであろう。前節2.1.-2.2で見たように、述語意味に対する意外な拘禁の方へ注意を向けているのであるが、共通のテーマとしての合意が成立する以前にもこの形式が使われ得ることを示している。

(62) Ayer pedí tres veces un impreso para poner un telegrama: escucharme me escuchó, pero no me hizo ni caso y me trata con indiferencia. [PA:8]

動詞の名目的意味が先行文脈の中に単独には存在しないが、その述語意味の具体的な個別事例がコンテキストで展開されて来ている、要約風に締めくくりとして新規の動詞が呼び出されたと考えられる場合がある。

(63) La verdad es que ni sabe qué hacer con la plata que gana. Y dos tardes por semana no recibe pacientes para poder estudiar, porque siempre se está actualizando. Una tarde de esas es para ella sola, para leer, y la otra tarde libre se encuentra con un grupo de psicológicos para discutir. En fin, que parar no para nunca. [CN:78]

核心は no para nunca 「一瞬たりともじっとしてられない」という意味を表現することにあり、

彼女が「休息をする」のか「しないのか」という点に対話者の関心の焦点はないし、また語り手の方も、そこに新たな題述の情報価値を与えようとしているのではないはずである。問題の精神分析医が、胴上げ文で表現される意味の属性を持つことは、より具体的にすでに提示されていて、それを簡潔な *no para* と凝縮する際の、この新動詞の表現効果を高める機能を持つのが「胴上げ」と言えるかもしれない。*no para* は「忙しくしている、働きずめである」という成句的まとまりをもつ意味と解釈できるが、このような場合でも、胴上げ不定詞が肯定形になる点は注目される。

胴上げ部はもちろんのこと、本体を併せたこの「胴上げ」構文は、概して、(63) のように短く収まる傾向を持っている。しかし、例外的にやや重い補語を伴った次のような事例も見出される。

(64) Inf.B.-Ah, eso ya no sé... pero...

Inf.C.-Es decir, estar enseñando como estoy yo enseñando, hay muchísima gente que está enseñando mucho más que yo. [BA:24]

ここでは、関係節内部の現在進行形の迂言形式全体 *estar+ndo* を胴上げ部に引き上げている。実際の会話データに観察された、このような例を文法化（統語化）の度合いが低い、「胴上げ」形式以前の萌芽的な現象と見ることもできるが、両者の間に動機づけられた繋がりが存在するのは否定できないだろう。

最後に、特殊な部類に属するが、胴上げタイプの要件に合致するものとして(65)を見ておこう。胴上げ不定詞文は否定を一般に受け付けないと見られるが、*por* で導入される不定詞が *no* を伴い本体動詞も否定されている例が見つかる：

(65) César y Damián hubieran preferido que por no existir, no existiera ni la Mica, por más que cuando ella venía de América le regalaban flores y cartuchos de bombones y la llevaban a los mejores teatros y restaurantes de la ciudad. [CM:84]

動詞 *existir* そのものは先行コンテキストで未出現であるが、話題の主人公 El Indiano の事業が順調で、沿岸貿易船、レストランなどの財産が殖えていったのに、子供は増えず、la Mica 以外に子供がいなかったことが強調されている(Lo que no aumentaban eran los hijos. Tenía sólo a la Mica...). この点では否定を含んだ <*no existir*> の概念を主題に据えるための条件は十分満たされている。この例は、取り立て部が接続法の要求されている従属節内にあるという点でも珍しい。

3. 近接構文

胴上げ文と一部の（多分、かなり多くの）構文的意味を共有する構造として、次のようなものをあげておく。これらは、胴上げ構造の発生の歴史的経緯及び不定詞がもつ固有の意味範囲の研究とも深く関わる興味深い問題を提起するはずである。

a) inf + sí/no

(66) -¿No te extrañó eso?

-Como extrañarme, no. Me ha pasado muchas veces. Steel(1985:178)

(67) -¿Conoce usted a don José?

-Bueno, conocerle, no. Pero... [ME:511]

cf. (50) Sentirme bien, no, porque...

(68) -¿Te la viste entrar en esta casa?

-No, señor, entrar, entrar, lo que se dice entrar, no, señor. La vi llegar, que es otra cosa. Steel(1985:178)

b) inf + lo hace

(69) llorar lo hace cualquiera, dormir lo hacen todos. Martínez Álvarez(1966:38)

(70) Sí, bueno, a mí me gustaba muchísimo lo de cantar ¿eh?, porque, claro, tocar el piano más mal o más bien, lo hace mucha gente. [MD:209]

c) lo de +inf +hace

(71) En cambio, lo de tener voz, como eso ya no es mérito adquirido, sino que viene de arriba, y yo tenía indiscutiblemente muy buenas condiciones de voz. [MD:209]

上記の文タイプa), b), c)は、動詞不定詞が参与する点で、本稿で取り上げた胴上げ構文と明瞭な接点を持っており、その意味機能においても類似性が認められる。すなわち動詞を取り立てて、その不定詞形を文頭位へ配置するところはa), b), c)に共通である。独立不定詞構文の派生タイプとして、sí/no を後ろに伴う文は、胴上げ文の定形動詞が省略された変種とする仮定が妥当ならば、a), b) が同じ基盤をもつと説明されるだろう。すなわち、共に同一言語表現を再出させない文法手段なのであるが、前者は削除でそれを実現するが、後者は代用形 *hacerlo* を用いることで同じ目的を達していることがわかる。

これらの2つの構文と胴上げ文もまた、基本的に同じ仕組みから成り立つことは、前者では避けられる語彙反復形式が、後者ではあえてそのまま言語化されると分析される。b)で、本体部に同一動詞語彙の定形でなく、その代用形式が用いられるのは、一般の名詞的項要素の主題化と

の平行性を考えれば、むしろより自然な方式とも思われる。c)は前の2つの構文種に比べれば統語化への移行程度は軽微であるが、話題の提示と抽象化を合図している導入子 *lo de* の使用は、この種の主題化操作に相応しい特色であり、胴上げ文と並べて、より大きな意味構造図式で捉えられるべき射程に入るだろう。

ここでは、残された大きな課題が少なくとも2つある。1つは、多くの議論がすでになされている動詞支配要素の主題化との関係である。主語・目的語・状況補語などの動詞前への取り立て構文と、意味上、同一の式型に還元されるべきか否か、どの点で差異が認められるかなどが問題である。

(72) ¿Qué te parece Marta?—Hombre, como guapa, es guapa pero tampoco nada del otro mundo. Cascón Martín(1995:138-9)

(73) ...que nerviositas son muy nerviositas y echadas para adelante. Cascón Martín(1995:138-9)

(74) Hombre, como listo, es listo, pero tampoco tanto como dicen. Cascón Martín(1995:140)

もう1つは、(述語内の) 属辞の取り立て p.ej. (72)guapa, (73)nerviositas, (74)listo もまた、胴上げの一種なのか、あるいは非述語要素の主題化に対して、これらがどのように位置づけられなければならないかという点である。

4. まとめ

胴上げ文の相対的な頻度を勘案すれば、述語意味を引き立てる方策としての(3)の図式は有標なものに違いないだろう。実際、留保や制限を付加するには、その趣旨の接続詞や副詞的語句の追加に頼り、その目的を達成できる。本稿で一応の特徴づけとして概括するならば、胴上げ文は次のような効果の触媒として作用する。

胴上げ動詞の意味する事態をP、Pから慣習的に、あるいは文脈依存で推論される結果、原因、含意される事態のいずれかまたは全体をEとする。

話者はEを明示的あるいは暗示的に否認したり、考慮外において、Pのみに対する真偽への関与であるとの限定を際立たせるとき、胴上げ文を用いることが出来る。

この構文の特性として、特に「述語の解釈制限」と「述語の即自主題」という2点に注目したい。2.1.節で確かめられたように、胴上げ動詞は、大抵の場合、話題度のきわめて高い述語であった。しかし、これは、述語への注目を引き起こすための必要条件であって、この構文のもつ性質としてはむしろ余剰的特徴を構成する特性と言える。

見方を変えれば、Pのみが話者にとって責任を持って断言できる判断・知識の領域内にあるこ

とを示そうとするのである。自己の主体的責任の範囲を制限するということは2面性をもつ。一つは、関わりを避けようとする「逃げ」であり、ためらいがちな断定であると特徴づける分析が生ずる所以である。また、この種の構文がしばしば、強調・強意の意味を表すと言われてきたのは、主題即題述に見られる焦点の凝集化に含まれる有標性を適切に捉える言葉が見当たらなかったためと思われる。

注

*本稿は第17回夏期スペイン語学セミナー：SELE97(1997.08.29、京都府立ゼミナールハウス)での口頭発表「スペイン語における胴上げ文の意味について」を加筆して、文章化したものである。

- (1) Hernanz(1982:415-16)はこれに反対し、主題化、dislocation、分裂化などの要素移動規則の実行の結果であると思われないと考えている。一方、もしこの種のなんらかのプロセスと関連づけなければならないとしたら、主題化よりはむしろ分裂文だろうと述べる。
- (2) もう一つは、主題としての資格を否定する見解である。述語は、定義上、主題になり得ないとして除外し、nadarは題述に属す内容であるが、それを確認するために、冒頭に提示しているとする。言い換えれば、「胴上げ文」では題述の先取り、あるいは予告と後続の題述が重なりあっているとみなす立場があり得る。

Referencias

- Arjona Iglesias, Marina(1989): "El infinitivo absoluto en el habla popular de la Ciudad de México"
 — y Elizabeth Luna Traill(1989):El infinitivo en el español hablado en la ciudad de México.
 Universidad Nacional Autónoma de México, México.
- Cascón Martín, Eugenio(1995): Español coloquial. Editorial Ednumen. Madrid.
- Hernanz Carbó, María Luisa(1982):El infinitivo en español. Departamento de Filología Hispánica de la
 Universidad Autónoma de Barcelona. Bellaterra.
- Jiménez Juliá, Tomás (1996): "Frase verbal, cláusula, estructura copulativa" — Moeni 1, pp.269-314
- Martínez Álvarez, Josefina(1966): "Llorar, cualquiera llora" — Archivum 16, pp.35-38.
- Rodríguez-Izquierdo, Fernando(1985): "Procedimientos de topicalización en el habla culta de Sevilla" —
 Sociolingüística andaluza 3, pp.31-49
- Skydsgaard, Sven(1977): La combinatoria sintáctica del infinitivo español.II. Editorial Castalia.
 Madrid.
- Steel, Brian(1976): A Manual of Colloquial Spanish. SGEL, Madrid.
 —(1985): A Textbook of Colloquial Spanish. SGEL, Madrid.
- Vigara Tauste, Ana Ma. (1992): Morfosintaxis del español coloquial. Gredos. Madrid.
- 出口厚実(1994): 「スペイン語 syntaxis 辺境への旅」関西スペイン語研究会第195 回例会口頭発表 1994.12.26
 於大阪外国語大学

Datos

- BA Instituto de Filología y Literaturas Hispánicas “Dr. Amado Alonso”(1987):El habla culta de la ciudad de Buenos Aires. Tomo 2. Universidad Nacional de Buenos Aires. Bs.As.
- BM Puig, Manuel(1996):El beso de la mujer araña. Decimosexta ed. Seix Barral. Barcelona.
- BP Casona, A.(1966):Juan J.Navarro 訳編 La barca sin pescador (漁夫なき漁船)、桂書房、東京
- CM Delibes, Miguel(1991):El Camino. Decimoquinta ed. Ediciones Destino. Barcelona.
- CN Puig,Manuel(1988):Cae la noche tropical. Seix Barral. Barcelona.
- ER Matute, Ana María(1994):El río. Plaza & Janes. Barcelona.
- LL Laforet, Carmen(1966):La llamada. 3a edición. Ediciones Destino. Barcelona.
- MD Esgueva, M.y M.Cantarero(1981):El habla de la Ciudad de Madrid. C.S.I.C. Madrid.
- ME Mihura, Miguel “Maribel y la extraña familia” en Ueda, Hiroto(1987): Análisis lingüístico de obras teatrales españolas(III) Textos e índice de palabras. Universidad Nacional de Estudios Extranjeros de Tokyo.
- NV Martín Gaité, Carmen(1992):Nubosidad variable. Anagrama. Barcelona.
- PA El País. No.199,1991/9/12, Temas p.8
- PS El País. Edición Internacional. Año XI. Número 503. Lunes 11 de enero de 1993, Madrid.
- SV de Pineda, Miguel Angel(1983):Sociolingüística andaluza. Encuestas del habla urbana de Sevilla—nivel culto—.Publicaciones de la Universidad de Sevilla.
- UV Laforet, Carmen(1966): “El último verano”—La llamada. 3a edición. Ediciones Destino. Barcelona.

(1997. 9 .10 受理)